

第2回鎌倉のごみ減量をすすめる会の概要

日 時 平成24年1月21日(土) 午前10時～12時

場 所 鎌倉市役所第4分庁舎811会議室

出席者 市民 計15名

鎌倉市

相澤環境部長、小池環境部次長兼ごみ減量・資源化推進担当担当課長
谷川資源循環課課長代理、松井ごみ減量・資源化推進担当担当主査
安倍資源循環課担当、竹之内ごみ減量・資源化推進担当

配布資料

- ・次第
- ・生ごみ減量チーム資料
- ・発生抑制チーム資料
- ・広報・啓発チーム資料
- ・事例研究チーム資料
- ・会の運営について
- ・鎌倉のごみ減量をすすめる会チラシ(案)
- ・広報かまくら3月15日号(案)

議 題

- 1 各チームの進捗状況報告
- 2 会の運営について
- 3 その他

内 容

各チームの進捗状況報告のあと、会の運営方法等について議論を行いました。主な内容は以下のとおりです。

1 各チームの進捗状況報告

松 井：それでは始めさせていただきます。本日、市長に関しましては事務局側の手違いで欠席となつてしまい、大変申し訳ありません、お詫び申し上げます。

各チームの進捗状況報告では、まず各チームから10分程度で活動状況の報告をお願いし、全チームの発表が終わってから、質問や議論を行います。

市 民：生ごみの減量をすすめるチームでは、基本的な考え方としては、自分たちの住んでいる地域を良くしたい。生ごみは各家庭、各町内会、市内で処理するのが基本であり、自分から率先して行動で示さなければならない。提案ばかりしても意味をなさない、まずできることから始めることが大事ではないか。4名で活動しているが、各町内会で生ごみの減量についての意識を深めて頂くために、生ごみ処理機をいかに普及させるかが一つのポイントではないかと思い、自分の住んでいる岩瀬町内会で、12月5日に回覧を回した。回覧には、鎌倉市の現状、問題、生ごみ処理機の助成金制度を書いた。また、鎌倉市が公募した大型生ごみ処理機の設置団体について、160世帯の大きなマンションに働きかけ、市から公募に関する説明を受けるようにした。自治会を動かしていきたい。次のステップとしてアンケートを配布し、その中からこの活動への賛同者を見つけ、その人たちを核にして普及運動を広げていきたいと考えている。今泉の廃炉問題もあるので、今泉の町内会

長に岩瀬と同じような趣旨を説明し、今泉町内会では3月の総会で話をする事となった。あとは他の町内会でできるだけ同じような運動を広げていきたい。市民、住民がこの運動を率先してやらなければなかなかうまくいかない。

2つ目として、我々自身の生ごみ処理機の知識を深めるために、12月に笛田リサイクルセンターと葉山在住のキューロの考案者を訪問した。

3つめとして、生ごみ減量についての個人的なブログを立ち上げた。

4つめとして、「鎌倉ごみバスターズ」というアプリについて、評価検証していきたい。

今後の活動予定としては、町内会への協力依頼をする。各家庭での減量意識、例えば水切りによってこれだけ減量できるというようなことをどうすれば分かってもらえるか、意識させられるか。いくら回覧を回しても生ごみ対策はやらない。具体的行動を積極的にやれるようにしたい。

それから、なんといっても事業者がたくさん生ごみを排出している。各家庭レベルの意識も大事だが、事業者の協力をいかに得られるか、鎌倉市では大きな排出事業者が51企業いるそうなので、いかに事業者に分からせるか、市民が市とタイアップして協力を得るようにするか、事業者向けの活動も一つの大きなテーマとして考えている。

市 民：発生抑制チームのメンバーはまだ少ない。今日もっとたくさんの方が参加すると思っていたので、発生抑制チームへの勧誘をするつもりだったが、これからである。12月に一度会合し、ブレインストーミングという形で、どんなことができるか、アトランダムに意見を出しあった。例えば、意識の高い事業者にどう働きかければよいかという意見があった。まずはメンバーを拡大したい。チームにいつまでに登録しなければならないということはないだろうから、どのような活動をするか分かってからの方が入りやすいと思う。

なぜメンバーを拡大したいかという、例えば意識の高い事業者へ働きかけをすることを考えるなら、例えばマイボトルを持ってきた人に飲み物を提供する、容器を持参した人にお弁当を詰める、といった取り組みをする事業者をどんどん増やす、そういった取り組みをするお店をマップに載せる、ウェブサイトにも載せるやり方もあるだろうし、そういったことも可能ではないか、お店にもメリットが分かれば、参加するお店も増えてくるのではないかと。それとともに、レジ袋はポテンシャルが高くて取り組みやすいところだが、鎌倉市ではまだこれから取り組む余地があるということで、まず事業者のヒアリングなどで、さらにどういうことが出来るか、話をしたい。市が事業者向けのセミナーを実施予定ということなので、その時にも意見交換などをするきっかけになるのではないかと。ぜひこの機会を活かして事業者さんと、無理やりやらせるとか敵対するのではなく、気付いたら面白い取り組みをしていた、というようにしたい。

最後に水Doキャンペーンというのは、水道水を飲もうというキャンペーンで、ペットボトルなどの容器に入った飲み物ではなく、水道水を活用することにより、二酸化炭素、ごみの量、社会的なコストなどを下げようというキャンペーンである。リサイクルをしても、結局はエネルギーを使い二酸化炭素は増えている。リサイクルをすればよいと思っている方もいらっしゃる。すでに全国的にやっているキャンペーンだが、ぜひ鎌倉でもやってみたら、と思っている。年間の予定については、まだ人数が少なく、複数チームにまたがり活動している人、働いている人もいて、3月中は4月以降に本格的に活動するための準備期間として、活動計画をしっかりと立てて、それから出来る範囲で事業者さんへのヒアリングなどをしていきたいと思っている。

市 民：広報・啓発チームについて、状況だけ報告する。12月12日にメンバーのうち5人が集まり、今後について話をした。この会の活動ではないが、12月21日に由比ヶ浜の招山で「くるくるサミ

ット」をやる話があったので、それと連携する話があった。パネルを展示する話が出たが、自分たちはパネルをもっていないので、市役所が持っているパネルを展示することとした。そこに、ごみ減量をすすめるティッシュもおいて、持ち帰りたい人には持ち帰ってもらった。生ごみ処理機を、木を使ってその場で作って公開していた。ごみを出さない屋台の展示もして、来た方にはアピールをした。

あとは、このチームは誰に広報するのだという話があった。ごみ減量の活動をまずサポートする必要があるということで、メーリングリストを作る話になり、開設した。拡大するなら逐次拡大したい。市内企業が開発した「ごみバスターズ」が年末ぎりぎりにアンドロイド版が公開され、1月にアップル版が出た。こういったものもうまく広報に載せて、市民に周知すればということがあるが、まだチームとしてどういうことをするか決めた段階ではない。

もう一つの取り組みは、自治会や町内会が結局、最終的にはそういうところに周知していくしかないのでは、という話があり、一例として、子ども対象の夏祭り、お宮さんの年中行事などあるが、こういうところでいろいろなごみ減量という観点から広報するとか、具体的に再利用型の備品を使うなど、そういうことがまだあまり知られていないのではないかという意見も出たので、そういうところから地道にやっていけば広がるかなという話もあった。

物々交換市「くるくる」とあるが、実はこういうことをしている団体は市内に50団体くらいあるのではないかという話もあり、全部が物々交換ではないが、現在鎌倉市内に350くらいのNPO団体があるが、そのうち50くらいがいろいろな形で協力してもらえるのではないかという話も出ている。そのあたりを掘り起こして、いろいろなチャンネルを使って情報を周知していく必要があると思っている。

そもそもこの話し合いの中で、14,000トン減らさなければならないことは分かっているが、そこに至る道筋が良く分かっていない。これはこのチームのメンバーも良く分かっていないので、たぶん市民も分かっていないのではないかという話になり、そういうことも含めて全体の中ではこうなっていて、結局何をやろうとしているのかを、もう少し考えたほうが良いと反省している。

市 民：他市の事例研究チームについて、メンバーは今7人である。経過としては、第3回コアメンバー会議の11月29日にメンバーが決まったので、連絡体制を整備して、メールでできる意見交換をかなり活発にやっている。今年にはいって、1月9日にチーム打ち合わせを行った。集まった出席者はバックグラウンドが非常に多彩で、市民活動に長けた方、地元でいろいろな細かい実情を知っている方、理論的な裏付けが得意な方など。まずはメンバー間のレベル合わせが必要だということになり、ブレインストーミング的なことで方向性を少し整えつつある。

添付の参考資料1にあるが、今後の調査の進め方について意見交換、市の施策を確認したうえで作業を進めることになった。事例研究チームの位置づけについて、ごみ減量施策取り組みについて、他市の成功事例や失敗事例からの要因分析を行う目的で実施する。おのずと新たな政策策定、活動内容に結びつくものと考え。事例研究と政策検討のチームはかなり密接なので、相互の連携、融合について今後は議論が必要かと思う。事例研究により浮かび上がってきた要因によって、すでに先行して取り組んでいる他のチームの活動との調整が必要となることも考えられる。いずれにせよ、チーム間の壁を小さくして情報交換を活発にしたい。

今後の進め方については、調査手順について、まず最初は調査対象自治体の選出をマクロな視点で行います。一般廃棄物の処理実態調査等のデータが出ているので、データレベルで減量化に成功している自治体を選出します。それから鎌倉市に過去に行った調査等が多分あると思うので、

それを提供してもらい参考になりそうな自治体を選出したり、新聞等情報から優れた減量施策を行っている自治体を選出する。調査の進捗・進行だが、選出した自治体の基礎情報等文献調査を行う。同時に電話または訪問によるインタビュー調査を行う。このときは、鎌倉市のご助言、ご同行を頂くなり、そういったことをお願いしていきたい。ただ、皆さんお忙しくて昼間はお仕事もあり、先方の都合もあるので、リソースが限られているので、網羅的な調査は避ける。どこかのクライアントに提出する資料を作っているのではなく、我々の活動に沿った調査をしようと考えている。直近の事案に参考となる、あるいは今後の施策検討に資する事例の収集を行う。調査をとりまとめ、結果を文書に取りまとめる。見える格好で残しておく必要がある。成功要因や失敗要因から得られたことについて抽出分析するのが大事だと思う。他の作業チームとの連携を行いながら進める。

先日、エコプロダクト展に行ったところ、川口市の市民環境会議の方が、立派なノウハウ集を作っていた。そこの方とお話をしたら、コンポスターというのはなかなかハードルが高いので、「生ごみの水分を一絞りするだけでも効果があるよ」ということだった。ガス化溶融炉について知人に聞いたところ、エンジニアリング的にいっても、一絞りはすごく重要だということで、そういったこともできるだけ情報共有していきたい。

日程について、まだ案だが、3月までは調査対象の自治体の選出、できることなら調査も一部やりたい。何を調べるかはやってみなければなかなか分からないと思うので、どんどんバージョンアップしていきたい。来年度は調査を本格化していく予定です。参考資料で、内部でもあまり議論していないが、調査票のイメージをつくったので、ご意見があったら承りたい。

松井：5番目の、新施策検討チームは何か報告があるか。

(無し)

松井：今までの中で質問はあるか。

市民：広報・啓発チームに質問。チラシを入れたティッシュを配布とあるが、ティッシュはどうやって手に入れたのか。

竹之内：市役所が作ったものを、置かせていただいた。このイベント向けに作ったものではなく、市の啓発業務の一環として作っていたものがあって、ちょうどよい機会だったので、使った。

市民：手作りの生ごみ処理機を展示して注文を受けたということだが、注文を受けるという事は助成金を受ける紙を、その場で申請できるような書類をどなたかお持ちになったのか。

竹之内：そもそも会としての活動というよりは、ここに来ている方も含まれているのだが、イベントの企画があって、そこに広報・啓発チームさんが関わったという形だと思う。行政としてもご協力するというので、パネルをお持ちしたのと、生ごみ処理機に関する助成の書類などをいくつかお持ちして、その場に置かせていただいた。

市民：広報チームに質問だが、メーリングリストでも回っていたが、「ごみバスターズ」というのは何なのか、良く分からなかった。この会との関係というか、どなたか市内の事業者の方が開発されて、鎌倉市公認と書いてあったが、公認とは何か。

小池次長：経過を説明する。市内のIT事業者さんから、鎌倉のごみ減量施策にご賛同いただき、一事業者としてご協力したいというお話があった。アプリの中で、鎌倉市のキャラクター「にゃん丸、ひめ、ぼん太」の使用のお話があった。もう一つは、ごみの分別や出し方の情報を提供した経過がある。今回、市内のIT事業者が協力するという形で作っていただいた経過があり、このすすめる会とは直接の関わりはない。行動チームとは別の立場で、市内の一事業者の立場で、市のご

み減量施策に賛同、協力したいという流れであった。

市民：ゲームソフトなのか。

小池次長：内容は、ごみ減量の取り組みを行うと、ポイントがたまり、キャラクターの絵がコレクションできるもの。また、地域を入力すると、ごみ出しの曜日が分かる内容もある。

市民：スマートフォンを持っていないので見ていないが、開発費用や広告料はどうなっているのか。

小池次長：全て開発したIT事業者が負担している。市の公認ではなく、事業者さんが協力して下さるので、市も情報提供を行っている。

市民：考え方としては、個人がブログで「ごみ問題を考えましょう」と訴えるのと同じということか。もうちょっと実用的なのかもしれないが。

小池次長：ゲーム的な感覚で減量に取り組むことで、ごみに対する意識を高めていこうということをしてIT事業者は考えていたと思う。ゲーム的な物とは別に、ごみの出し方に関するものも一緒に作っていた。

相澤部長：おそらく、今まで若い人にあまりごみに関心を持っていただけていないという問題意識があり、実際にスマホや 아이폰 を使っている年代が、ちょっとしたきっかけでこのアプリを知りアクセスすると、例えば、今日は残さず食べたというアクションをすると、鎌倉の名産品などのアイテムをもらえて、じゃあ次にアクションをすると何がもらえるのかな、と。たくさんアイテムを集めても実際に何かがもらえるということではないが、いろいろなものを集めてみようということで、アクションをしてもらえれば良いな、というアプリになっている。

市民：この会のウェブサイトは、広報チームで準備していただけたのかなと思ったが、それについては特に報告が無かったがどうか。

市民：そういう計画は今のところは一切ない。広報チームは、だれに対して何を出すのかがまだ良く分からない。だから出せない。チームのメンバーが個人でブログを作ったが、なぜあるのか。広報・啓発チームが作ったのだらうと聞いてきた人がいたので、うちは関係ないと回答した。何か必要なのはわかっている。だから、先日の全体会で「この会は何をする会なのか」と言った。公開するものを作るとなると、誰かが内容をチェックせざるを得ない。そうなる就非常に変なので、まずは内部的なメンバーリストは整備したが、外に出すものをどうするかは大問題。したがって、今日は問題提起頂いたと受け止め、宿題として持ち帰る。

市民：個人が作ったブログについては、メンバーの一人として純粋に鎌倉の生ごみを減らしたい、みんなの意見を集めディスカッションしたいということで始めたと思う。目的は、ごみを減らしたいという1点だと聞いている。

市民：ブログを作ったメンバーのメールで、「資源循環課の方にも報告して許可を得たうえで」と書いてあった。

市民：そうは書いていない。コアメンバー会議で話題になり、あれは個人的なブログであるということが分かったので、タイトルがこのすめる会になっているのはまずいということで、会のメンバーの一人のブログであることが分かるようにしてください、となっていた。

市民：今日はコアメンバー会議の報告が無いので分からない。

松井：まだこの会は第2回目の全体会で会の意思決定方法が明確ではない。本日の2つ目の議題として、そのことを討議する予定としている。また、コアメンバー会議というのは、第1回でお話しした通り、あくまでも運営委員会的なもの、全体会をいつどんな内容でやるのかを話し合う場であり、コアメンバー会議の場で意思決定や何かを承認する位置付けには至っていない。したが

って、今回特にコアメンバー会議の報告を設定していない。

今のお話が良く分からなかった方もいらっしゃると思うが、この会のメンバーでコアメンバーになっていただいている方が、「鎌倉のごみ減量をすすめる会」というブログを善意で立ち上げてくださった。それ自体はこの会のメンバーも特に知らずに、会を名乗ったところが問題となった。勝手に何かをやろうという意図は全く無く、活動が広がればということやっていただいたが、会の意思決定方法が明確でない中で、独自に動かれたので、それはどうか、ということになった。

市民：そういうことを、コアメンバー会議の場で議論したのか。

松井：そのとおり。

市民：なぜコアメンバー会議の報告をしないのか。自分はコアメンバーになっていないが、全体会をやってもそんなに人数は増えていない。これはそちらの意図する通りになっていないのかもしれないが、本来は10倍くらいいて、それではまとまらないので、ということでコアメンバー会議をするなら分かるが、コアメンバーは10人くらいしかなくて、ここに今20人くらいしかいないのだから、分けても仕方がない。経過報告もしなければ訳が分からない。

小池次長：1月16日にコアメンバー会議をやって、本日の会の運営を議論した。全体会があり、コアメンバーがあり、各チームがあるが、そのあたりのどこでどう意思決定するかなど、また後でお話しさせていただこうとしていた。コアメンバー会議で何をやったかという、本日の運営、どういった運営がいいのか、まずは各チームからの報告をするというお話があった。あとは、これも後程ご説明しようと思っていたが、3月17日に、講師をお招きして、すすめる会として、ごみに関するイベントをやろうということ議論した。それについては全体会で改めて報告しようと言っていた。あくまでも今の段階では、コアメンバー会議は次の全体会の前に運営についてご協議して頂く、という経過である。

松井：各チームの議題、今後全体会で議論していくものについてのご意見を賜りたいが、まずは新たな政策研究チームについて、事例研究チームと一緒にではないかという指摘があり、メンバーも重なっているので、両チームを合わせて一つのチームとしてはどうかというのをまずは皆さんにお諮りしたい。2つ目に、ブログやホームページをこの会として持つのかどうかも、皆さんのご意見を聞き、どこでどうやって持つのか、どうやって更新していくのか、基本的な方針、共通認識を本日ご意見を頂けたらと思う。まずこの2点を先に議論したいのだがどうか。

まずは2つのチームを1つにするという点はどうか。

市民：チーム間で話をしてもらい、異論がなければまとめれば良い。

松井：両チームでメンバーがかぶっているため、具体的に(5)のチームとしては話をしていない。チームのメンバーの間では、「まとめていい」という話になっている。最初は事例研究チームは他市の協働事例を研究しよう、(5)は施策を研究しようというスタートだったと記憶しているが、やっていくうちに、基本的に同じだという流れになりつつあり、別に動いていることもないので、全体会で皆様の反対意見が無ければ、効率的だということでお諮りしている。

市民：諮るも諮らないも、決定する権限のない会議をやっている。勝手に「そうになりました」と言えばお終いではないか。

松井：確かに順番が前後しているかもしれないが、ご了承いただきたい。では、2つのチームは統合することとし、活動していく中で具合が悪ければまた考えていくこととしたい。

次にブログやホームページはどのようにするか。ご意見等はあるか。

市民：減量をすすめる会は、市と市民と事業者が合体した団体と捉えている。今日は全体会議とい

うことなのでもう少し人数が多く来るかと思ったが、人数も少なく、事業者の方が来ているのか分からないが、まず会の位置付けをもっと明確にして、今はこういう世の中なので、ブログなどは当然、あった方が良くと思う。会の位置付けがはっきりしなければ動けない。川崎の市民会議の例を参考にして位置付けを決めていってはどうか。

市 民：一方で、市民に対する広報は、市の広報が一番効果があるという考え方もある。市の広報に連続的、継続的に出すのが一番意義がある。変なホームページを作っても見る人は少ないし、周知徹底はしない。自己満足はできるが、努力の割にあまり意味がないのではという意見もある。作って悪いわけではないが、それよりもっと大事なことは広報に継続的に出すことで、それはすごく難しい。しかし、こういう大事件だからやらなければならない。そういうところまで市長はやるべき。

市 民：広報かまくらは見ない人が多いのではないか。

市 民：広報に出たものは信用される。ホームページを作るのもいいが、それだけでいいというのは間違いで、実は一番大事なのは市の広報。但し問題は、市の広報は当然、市が出している。この会の活動でそこに記事を出すのか。だから最初からこの会は何なのか、位置付けをはっきりする必要がある。完全に任意団体で活動をしたければ、勝手にホームページやブログを作ればよい。そうではないとすると、どうするのか。

市 民：そういうことを、我々が考えなければならないのではないか。市に「やれ」と言っただけでも、市も初めてのチャレンジのところもあるのだから。我々の会がどういうベクトルで進んでいくのか。評論するのは簡単だが、どうなるわけでもない。我々自身がどのような方向に向かうのか、チームが、この会がどのような方向に向かうのか。それを組み立てていくのが大切。

市 民：私がここに来ている個人的な理由は、もともとごみを減らすという鎌倉市民の動きがあって、それはずいぶん前、10年も前からあって、いったん官民連携でやっていたものがクローズして、松尾市長のバイオマス施設をめぐる問題で再燃したが、市民運動としてごみをもっと減らせるのではないかという話が2年前くらいからあった。市民がやっているなら、もちろん市も一緒にできることがあったらぜひ協力したい、ということで、この官民連携の会議がスムーズに立ち上がったと思う。基本的には私たち市民の側がまずありきで、何をしたいかを私たちが決めて、予算が行政でなかなか付かないが、付くのであれば付けたりして、それぞれのチームで考えたことを実現するときに、市民だけではやりきれないことを行政がやって、ごみの問題は公共の問題なので市民だけでももちろん任せていられない、ということで一致協力してやりましょう、ということではないか。この会の目的は何かというと、私の目的は、どこに目標を設定するかではなく、ここに来ることが目的だと思っている。ここに来て、皆さんの意見をお聞きして、「それいいね、もっとこうなるんじゃない」など持ち帰って自分のできることをやっていく。行政として予算の無い中サポートできることがあればしてもらおう。例えばIT事業者の取り組みも、市内の一事業者として取り組めることとして「ごみバスターズ」ができて「いいね」と。それをもう一歩突き詰めて、14,000トン減らそう、ということにしてもいいが、それが行き詰っていたのが1年前だったと思うが、14,000トンに1,000トン足りようが足りまいが、ごみを減らすことはいいことじゃないか、という基本的な鎌倉市の考え方があると思ってきている。だから最近では私にとってはここに来ることが目的になっていて、せっかく来た以上はいろいろな人の意見を聞いて軌道修正したり仲間を増やしたり、というのではいけないかのもかもしれないが、私はそれで来ている。結果的に14,000トン減ればそれは素晴らしいこと。来ることが目的ではレベルが低いのであれば、も

っと高い目標を、皆さんとここで話をするのもよいだろう、という理解だ。

松 井：会のそもそもの根っこが揺らいでいるところがある。その中で、確かにホームページやブログは一つ的手段として有効ではあるが、まだ会としての発信はまだしない方がいいのではないか。本当は順番が逆だが、ホームページとブログの話は会の方向性、目的、趣旨がバラバラのところがあるので、そこは今後ということで、よろしいか。

(了承)

松 井：ありがとうございます。では休憩に入り、その後に会についての話をする。

～休憩～

松 井：会についての話をする。そもそも募集の時、市内の人を対象にしており、市外の方は募集していなかった経過がある。そのようななか、口コミで「貢献できますよ」という市外の方、勉強したいという方も来ている。この方々をどのようにするか、コアメンバーの中で話し合ったが、ごみを減らすという究極の目標には市内外は関係ないのでアドバイザーとして入っていただいではどうか、という結論だった。「コアメンバー会議では何を決めるのか」もはっきりしていないので、ここで諮らなければならない。アドバイザーとして入ることでよいか。ご意見はあるか。

市 民：在勤、在住、在学ではない人についてか。もともと幽霊団体だからいいのではないか。

市 民：他の市であっても、鎌倉のごみを減量をすすめることに積極的に取り組む人があるなら、どんどんやってくればいいし、メンバーとして区別する必要はないと思う。やってくれるならどんどんやってもらえばよい。

市 民：アドバイザーという呼び方はいかがなものか。

松 井：前後するが、なぜこういった話をするのかというと、会として正式に役所っぽく運営するならば、まず全体会があり、上部的な意思決定の機関があって代表者がいる、ということだろう。会の意思決定をするときには、「会の成立が何分の何以上の出席」「意思決定には過半数の賛成が必要」などという形が考えられる。そういう規約等を整備していくならば、やはりすべての人をエルカムでやるのかどうかが問題になってくる。例えば、市外の方が代表者をやるとした場合、その人が決定権をもって行動を起こしたときに、「それでいいのか」というところまで考えると、ある程度の区分けが必要ではないかという意見があった。「来るな」ということではないし、「他市だからこそ言える」ということも大きいと思う。入っていただくのはありがたい。しかしながら、ある程度は区分けはした方が良くはないか。入っていただいた後に、ある日突然「あなたは決定権がないですよ」というのも酷ではないか。この段階である程度の区分けをしつつ、市外の方でも関心のある方にはぜひお力をお貸しくださいとした方が良くはないか、ということで、アドバイザーという名称を用いてはどうか、というのが話の筋である。

市 民：それをいうなら、この会が幽霊会じゃないか、どうだっていい。本当に市が仕切りたのだったら、この会の規約を出すべきだ。その方がずっとすっきりする。そうすれば、市外の方をどういう位置付けにするか、もしかしたら市外の人の方が大事かもしれない。この会自体がおかしい。

市 民：それはこれから決めることではないのか。

市 民：今までの話を聞いていると、会の意思決定の方法、運営を、最後に話し合おうというのが無理だと思うので、最初に意思決定の方法を諮ってからいろいろ考えたほうがまとめやすいのでは

ないか。

松井：そのとおり。

市民：市外の人の話については、「市外だからその人は入れない」といった一律の話ではなく、その人がどういう人か、どういう立場なのかというのが重要。最初のイメージではこれまでの集まりでは、どちらかというところからお願いして来てもらうような立場の方を想定していた。そういう人は無理に何らかの立場を負わせるというよりは、アドバイザーかなと思った。心配は、市外の人でもOKとして、名前だけ登録して、メーリングリストに入って、何もやらなくて、「鎌倉ではこういうことをやっている」という情報だけを得るような方。他のところでその情報を使われてしまうということが警戒されると思うが、「どういう人なのか」ということで判断したほうが良いのではないか。

市民：市内の人間は鎌倉から逃げられない。市外の人間は都合が悪くなったら姿を見せなくなれる。それがあから、善意である限りは、あくまでも名前としてはそういう位置付けとして、扱いは同等とすることではないか。

松井：先程、議論の順番が逆になっているというご意見があった。今日やりたかったことを通して説明してもよいか。今日は、コアメンバーを固めて、かつ、これからホームページを作る場合など、仮にホームページやブログを更新する場合、チームのリーダーのOKが出ればやるのか、一回一回全体会で決めるのか。会を代表する場合、行動する場合の決定の順番を決めていく、というのが本日やるべきことであった。もともと会が確定する前に、活動、行動に入っている状況がある。こういう話をしたかったので、市内外の人のお話が出た。行政として「こうしてください」というのは、あえてやっていない。先程のブログについても、意思決定方法が決まっていないからこそ、「好意で」というところもあると思う。アンケートなど住民に広報していくなかでは、メンバー間の中で「私は知らなかった」という状況を無くしていくために、「組織を作りたい」「あった方がいい」ということかと考える。

皆さんのご意見を伺いたい。

市民：市民と事業者、行政が三者一体となった会議であるほうがよい。目的を達成するために。各主体がばらばらだと限界がある。三者が全部入った会にして、当然、コアメンバーも市民、事業者、行政から名前を入れる、そういう会の運営ができる組織にしなければならない。市外からメンバーになりたいという人がいればどんどん入ってもらえれば良い。情報を悪用されるという点は、そもそも隠すような情報があるのか、鎌倉の良い情報があれば市外の人を通じて全国に伝わればまたいいことだと思うし、悪用されることは考えていなかった。この会を本当にちゃんと目的を達成するためにはどうするか、ということでコアメンバーを決めることが必要だと思う。今のところ、事業者が出てきていないが、本当に事業者に出てもらわないと、短期間に10,000トン減らすのは無理。

市民：14,000トン減らすのが目的ならば、それをどうするのか考えるべき。まず14,000トン減らせるのか良く分かっていないが、全体を減らす話ならいい。減らすことに向かってやればよい。一方、ある時期までに14,000トン減らすのだという話なら、相当大変じゃないか。

市民：それは、70,000トンから半減の時にも、あと5,000トン達成ができなかった。

市民：今回、タウンニュースで市長がスーパー焼却炉の建設を表明した。ということは、具体的にハードを用意しないと追いつかないという話ではないか。

市民：市長が今日は来ていないので、聞けない。

相澤部長：市長がタウンニュースの元旦号で書いたインタビューが載った内容については、「単に事業者、市民の努力だけではごみはきちんと処理できないのではないですか。施設が必要ではないかという意見がありますがどうですか。」という質問だった。それに対して市長は、いま、名越のクリーンセンターは10年程度延命化すると言っているが、「いずれにせよきちんと焼却施設は必要です。その準備には少なくとも10年はかかると考えています。大変時間がかかるので、今からきちんとその検討を始めます。」と申しあげている。今まで申しあげていることとなんら変わりはないのだが、市長の気持ちとしては、今後のごみ処理を危うくしないために、きちんと今から本格的に検討をしてみたい、ということを示している。当初から、名越は30,000トンしか燃せないのだから、最低10,000トンは減らさなければならない。それを当面の目標にしましょう、ということは、この会の中でも確認している。それは変わりはない。ただ、実際にそのために何をやっていくのか、市役所でしかできない仕事はやはりある。それは、事業者にきちんと分別するための行政指導をしていくことや、例えば家庭系のごみを有料化して制度を変えていくとか、事業者の手数を上げて発生抑制のインセンティブを上げるとか、あるいは資源化手法をもう少し増やすことで燃やさないことにするなど、制度的にやらなければならないことはきちんと行政でやる。そうは言っても、先程、皆さんからご意見があるように、市民や事業者の側からしても、その制度に乗るだけではなく、もっと手前でやること、やるべきことがあるのではないですか、ということをおっしゃって頂いている。それを市民や事業者として運動を通してやっていくといいな、というのがこの会だと思う。一緒になっていきましょう、というのが目的。ですので、この会だけで10,000トン、14,000トン減らそうと言っているのではないことは、皆さん、認識しておいて頂いて良い。

松井：会として、きちんとするべく、意思決定できるような三角形の組織をつくる、という方向で、コアメンバーの方々と話をする、ということによろしいか。コアメンバーで話をして、各チームからリーダーを選んでもらい、リーダーにはコアメンバーに入っていただくことにしたい。全体会もあり、コアメンバーで決めて良いこと、全体会で決めること、チームで決めて良いことなどを整理して、会の骨格づくりの原案をコアメンバーでつくる、という流れを踏んでよいか。

会長的なものを選んで、会としての組織を今の状態から少しでも現実的なものに移していくことをする、ということによい。

市民：コアメンバーの会を1月に1回しかやっていないことがけしからん。度々集まるからコアメンバーを作ってやるのだという話だった。1月に1回しかやらないのなら、全体会と一緒によい。せめて1週間に1度くらいやらなければ、全体会をいつやるかだけを決めるようなら、コアメンバー会議はやらない方がよい。出ていけばそれとなくニュアンスが伝わるので、報告してくれといった変なことは言わなくて済む。

市民：提案がある。現在のコアメンバーは、意思決定機関のメンバーとして集められたわけではなく、今後の運営についてももう少し密に連絡をとって検討していくメンバーとして手を挙げた人たち。たまたま、その人たちが所属するチームがばらけているが、コアメンバーに入っていない人も積極的に各チームで活動している人もいると思う。私の意見としては、一度、このコアメンバーは解消して、すでに4つのチームがあるが、この中で、1人に責任を負わせるのはなんだし、リーダーと呼ぶとその人に責任が押し付けられてしまう感じがするので、コーディネーターという世話役として、各チームで例えば2～3人出してもらって、そのメンバーがチーム内のコーディネーターもやり、他チームとの連携や全体の進め方についても検討する、コーディネーター会議

をやるという形だと、今よりうまくいくのではないか。

市 民：この会が出来る前の会は、「鎌倉のごみ減量化・資源化をすすめる市民会議」というものである。立ち上げたときに、その当時の市長は「半減運動をしたいのだ。半減運動というのは 35,000 トンにしたい。本当に 35,000 トンになるのか、ならないのか、そのために市民を一度集めよう」、と。どういう人を集めたらいいのか、地域性を持っているということで、各自治会長さんを対象にしよう、鎌倉市がやっている推進員を対象にして公募しよう、という形で公募して、当初 20 名ぐらいでスタートスタートしたが、全部で 33 名も集まった。数多く集めると議論がまとまりにくい。絞ろうかという話になったが、33 名全員入れることとした。いろいろなプログラムが出てきて、分科会というのを作った。分科会にはそれぞれの責任者を付けた。市民会議の運営はあくまでも市民が主体。したがってその座長は市民の代表者。そこで最初に、どういう形でこれを進めようか、目的のためにはどういう内容にしようか、そのために規約をつくった。規約の中で、先程から話が出ているように、アドバイスを受けなければならないことも出てくる。そのための器をそこに作っておこうということで進めたが、主体はあくまで市民であり、市民は行政に命令する。したがって、市民会議から市長に中間提言をした。そこには行政も中に入るのだが、あくまでも行政は事務局として入った。したがって、それらの軸を 1 つ 1 つ作っていかなければ、議論がまとまらない。そういったことでは、いま分科会が出来たのであれば、分科会の中から座長を決めてください。その分科会の中で出てきた意見を、「じゃあ運営会議をつくりましょう」「運営会議で方向性をはっきりさせましょう」、と。それに必ず職員が出てきます。分科会が出来ました、月に 1 度、当時は月に 2 回、場合によっては 3 回やったこともある。その時には行政から人を呼ぶ。こういう内容が分からないから「お前たちどうするんだ」「中身のデータを全部こっちへくれ」というやりとりをしながら、半減運動に繋がるための運動を進めた。私はこの会議ではそういった規約からスタートするのも一つの方法かな、と思う。それがないと、もやしみたいにいっぺんに芽が出てきて、まとまりがつかなくなる、と解釈する。前の市民会議を作ったときの経緯があるので、それが参考になればと思う。

市 民：今の話を伺って、決定的に、今の会議と前の会議の違いが良く分かった。前回、ごみを半減するという、ものすごく明確なゴールが行政側からあった。今回は官民連携会議になっているが、ゴールが良く分からない。

市 民：そんなことはない。ゴールは良く分かっている。行政は平成 27 年度までに 14,000 トンを削減したい。

市 民：しかし、それを松尾市長からあまり感じない。そこが私の中では今一つクリアになっていない。松尾市長は本気で減らす気なのか。

市 民：そもそもこの会議は、松尾市長が言っている「14,000 トン減らす」、ということを目標にして集まるのではない、というのがあり、松尾市長が去年、出席して、「目標値の何万トンはいったんは忘れてください」ということをこの会に対して言った。私はそれを聞いて、「なんだそうなのか」と思った。だからといってごみを削減しない訳ではない。

市 民：行政の人も定年があるのだから、途中で逃げることはできる。しかし、私たちの地域の中にある、焼却場の周りに住んでいる人は逃げられない。その中で、竹内市長の時からやり始めたのは、行政の計画を市民サイドで本当にどういう形だったらできるか、半減運動をする手法としてどんなものがあるか、それに対して市民がどう協力できるのかということで、半減するための市民運動を進めた。ターゲットはある。ごみ処理基本計画の中に、削減率、何年までにどれだけ減

らします、事業系のごみはこうします、というのが出ている。その事業系のごみを減らすためには、行政と事業者だけの対話では減らないと私は思う。事業者はどこを見るか。消費者、すなわち市民を対象にしている。市民と事業者と行政が三位一体にならなければ、絶対できない。私たちも、当時事業者に対して動いた。事業者で生ごみ処理機を持っているところがあるから、そこへ見学に行った。それはスーパーマーケットだった。生ごみ処理はどうしなければならないか、どういう処理方法だったら事業者がそれを扱ってくれるのか、を検討しながら進めてきた中で、一律に言えることは、生ごみ処理機はかならず生ごみ処理を運転していくための管理者が必要。管理者がいなければ機能しない。そこで一つ出てきたのは、野菜などの生ごみ処理なら良いが、そこにパン屋さんが入ったら大変な騒ぎになる。パンの生クリームは分解しない。それにどんどん詰め込むと、生ごみ処理機は満杯になる。このようなことを事業者と市民と行政がどんな形で進めましょうか、と協議する。あるいは生ごみ処理機の普及「1,700 トン減らします」では1,700 トンを現実の問題にするには、市民はどうしたらよいかということを実行していた。ところが、それは結果がなかなか見えないのは、見えないデータがあるからだった。データを見せてもらえなかった。行政としてそれを出すのは、行政が予算を立てるから、「生ごみ処理機助成金として今年度はこれだけ使いました」「予定通り使いました」、と、これが行政の答え。我々は、使った結果、本当に身になっているのか。その調査は誰がやったのか。こうなると、「そういう調査を私たちがやろうよ」と当時の市民会議は動いた。この会も、市民は、そういう中に飛び込んでいくということも、この会の目的だと思う。

市 民：皆さんが新たな意欲で取り組んでいるのはうれしいが、すでに市民会議の中で、生ごみ削減について、いろいろと活動した。市もあの時は生ごみ処理機を啓発してくれということで、市内のスーパー前に立って使い方などを啓発した。買ってもし続けなければ結局はごみは減らない。友人にもいろいろ聞くと、結局、使いこなせていない方が多くて、市のお金を使っているのに、税金が無駄になるということ。

市 民：具体的に何年ぐらいの話なのか。

市 民：もう10年ぐらい前、竹内市長の時代からずっと私も関わってきた。

市 民：クリーンステーションでの取り残しの問題が出てきた。外部から転入してきた人がそのルールを知らない。

市 民：細かいことも啓発して、ずっと続けてきた人たちがいるということもあり、家庭系ごみは分別はきちりされていると思う。リサイクルの率が一番と言っても、リサイクルをするにはお金がかかるので、さらに進めて、発生抑制も今度は考えていかなければならない。なんでもリサイクルするからいいのよというのではいけない。

市 民：目的は明確で、「10,000 トン減らす」ということだから、この会に入った。市民と事業者と行政が一体となった会だと伺って、ならば非常に良いと思って入って、私たちとしてはこういうことをやったらよいと思うことを、今、やっている。この会の目的は非常に明確だと思う。非常に実現は難しいけれど、そのためにやっていきたいと思いますということ。そのために、私は町内会と今、話をしているが、自分の立場がはっきりしない。町内会の人たちは、この会のことを知らない。町内会には推進員がいて、彼らが、この会は何なのかということも出てきている。そのためにはまず、この会を、市民、事業者、行政で立ち上げた会で、こういうことなんですということをはっきり示して頂かないと、活動が非常にやりにくい。まずそこをはっきりして欲しいのと、その後、運営方法を決めて早く3年間で10,000 トンを減らす方向でやっていかなければならない。時

間がない。

市 民：市民会議では、商店連合会の会長まで、各分科会に呼んだ。事業系のごみについては分別が徹底されていない。それに対して、どういう方向で徹底することができるのか。許可業者の人たちも呼んで、こういう状況であなたたちはどういう収集をしているのか、というようなことまでやりとりした。鎌倉市の分別はこうなっていますから、という形で分別方法を不動産屋さんまで配りなさい、ということまでやっていた。

市 民：この会で1万トン削減は大賛成である。官民連携会議を作って、ごみ削減に対してもっと鎌倉市として積極的にやってください、議員から議会に提案してください、と観光厚生委員会で2回陳情した。しかし、多数の議員さんが、「鎌倉市はもうごみを減らすことは出来ない」と言った。それで、そんなことをするぐらいなら、バイオマス施設を作った方が良いということで、私の陳情はもう2回否決されている。翻って、その議員さんがおっしゃったのは、「でもごみの分別はできる。生ごみの分別は毎日できる。でもごみを減らすことは難しいんです。」と言われて、「私は全然わかりません」と言って終わった。生ごみの分別ができるなら、減量も毎日できるのではないか。否決された。変な話で、行政の方はこの1年大変だったと思うが、ごみを減らすのは良いことだが、それを何か変な政治的なゲームに使う人たちがいるので、そういう軋轢もあってなかなか進みにくかったし、これからもそうだろうなというのが、この会の目的をやはり10,000トン減らすということに戻ったときに、「できないに決まっている」といった罵声を浴びせられる可能性がある。今の鎌倉の現状は、政治的なツールにこの案件が使われて、本来の意味を忘れられていることも多分にある。良くないと思っている。

市 民：そうだとしたら、市民は本当に運が悪い。市民は何のために協力したのか。

市 井：そもそもの話も出てしまったが、次に進めたいと思う。今の流れを整理すると、4チームの中からコーディネーターを2名以下くらい選んでいただき、そこで話をして、組織の原案を作るということにしたらどうか。1点、コアメンバーはもともと会の運営をやっていることと呼びかけているが、司会を私がやっている状況にある。コアメンバーはいったんリセットし、各チームからコーディネーターを2名以下出して頂き、代表者も、名称は座長でも会長でもいいが、決める、という形で、今後の活動、意思決定の方法を決めたいと考えているがどうか。

市 民：今までコアメンバーだった人が必ず入るのではないか。

市 井：もちろん構わない。

市 民：せっかくチームに分かれてこの1ヶ月考えてきたので、チームは解散しない方がよい。もう一つ提案したいのは、一度、行政を抜いて、市民だけで集まるのはどうか。官民連携の会議をやめるわけではなく、一度、市民だけで集まって、いま考えていることも、市民だけの立場で見たらどうかということについて話をしたらどうか。行政の人が前に立つと、音頭の取り方が行政の人も難しいと思う。この会議に関して市民だけで集まってみたことはないので、提案する。そこで考え方をクリアにしてはどうか。

市 民：行政を抜く理由が分からない。行政がいて困ることはない。

市 民：会場を確保してもらって同席してもらってもよいのでは。

市 民：今は市に音頭をとってもらっている。ある意味、そこにおんぶにだっこになっている。

市 民：それなら、次回やるときに、司会を市民がやったらよい。

市 民：もちろん、それでも良いかもしれない。行政と市民は重なっているところと、重なっていないところがある。行政はパブリックサービスで、市民はライフスタイル。重なっているのは税金

の使い方。基本的にはライフスタイルをどうするかという話になる。税金を使うから、市民と行政は一緒に動かなければならない。市民側の動きは、実はもう少しライフスタイルのところに目指していくところがあって、それは行政に音頭を取ってもらおうとどうしても難しくなるので、行政の無いところで自分たちのやりたいことを話して、腑に落ちる場も良いのかと思う。そこに行政の方がいてもよい。

小池次長：この会をどう進めていこうかということ、今日皆さんとお話ししたかった。先程、コアメンバーをリセットするという話があったが、せっかく立ち上がったばかりであるので、こういった今日の場を踏まえて、どういうふうに意思決定していったらいいのか、ある程度の案をコアメンバーの人たちで話をして良いのではないかというのが、私の一人のメンバーとしての意見。リセットすると、今までのコアメンバーは無しで、また各チームから出してもらうということになるが、せっかくコアメンバーを立ち上げたばかりなので、それはどうなのか。そのあたりを次にどうするか、はっきり決めておいた方がよい。

市 民：何年やっても、ずっと同じことの繰り返した。誰をリーダーにするか、決めてしまったほうが良いのではないか。

市 民：各チームのリーダーを決めるという案も良いと思うが、せっかくコアメンバーが動き始めてほとんど何もしていないところで解散してしまうのも、何かと思うので、コアメンバーは今ままでよいのではないか。現在のコアメンバーは各チームに分散しているので、しばらくはこれでやってみてはどうか。

松 井：コアメンバーでもう一度、意思決定の方法の原案をたたき台をつくり、今までの活動は始まっているところもあるので、整理させていただきたい。次回、お諮りすることになるというまとめでよいか。

市 民：いつ、どういうかたちでコアメンバー会議をやるのか、行政は抜きにするか。

松 井：本日欠席の方もいらっしゃるので、いらっしゃらない方の意見をどうするのか、そこも正直はっきりしていない。今回の話の結果をご報告したうえで、次のことを、というステップを踏まざるを得ない。

話は変わって、3月17日に、この会に入っていない方にも来ていただけるような機会を設けられないか、ということで、市役所で講演会を開催できれば、と考えている。これはコアメンバー会議の中での提案。3月17日土曜日だが、NPOゼロウェイストアカデミーの理事、かつ葉山町の臨時職員でいらっしゃる松岡さんに、ゼロ・ウェイストで有名な方だが、この方のお話を聞いて少しディスカッションのようなもの開催し、終了後にすすめる会でやっていることを来場者に紹介したい。すすめる会として実施したらどうか。

市 民：ごみを減らすには、事業者をどう取り込むかが重要である。

松 井：今回の講演会は、事業系ごみ対策は、あまり対象になっていないと考える。

市 民：すすめる会として、会の名前を広く出したいということもある。

市 民：それならば、3月17日になる前に、会としての恰好をつけておくべき。こんな状態で来月、講演会をやりました、という報告だけをやるような順序でやるなら意味がない。このようなところに会の名前を使うべきではないと思う。

市 民：なんでもアリ、でいいのではないか。最初からルールに乗せて軌道を走らせる必要はない。

市 民：だからそれを実質に合わせる努力をすべき。3月17日にやるならば、その前までにもうちょっとこの会がきちんとするように市も市民も努力すべき。1年やってきて全然進んでいないのだ

から。3月17日までにコアメンバー会議を1回はやるのだろう。

松 井：リミットもあるので、それでやらせてもらいたい。

相澤部長：市民ががんばるのだ、と力強く言っているから、場所と時間を設定するのは役所がいくらでもできる。次回コアメンバー会議を実施して、その後は検討結果を踏まえてもう一度3月17日の前に全体会をやった方が良いということなので、時間と場所のセットは役所の仕事。これで確認した方が良い。

松 井：もう一度、全体会をやるということで、良いか。
(了承)

松 井：場所を設定してやらせてもらうので、どうぞよろしくお願ひしたい。

市 民：人数も少ないので、コアメンバー以外の人にも参加してもらってはどうか。コアメンバー以外が参加したいと言ったら、反対する理由がないと思う。「自分は積極的に行動したい」という人がコアメンバーに入っていないと、その会議で積極的に入りたいなら、自由にしてもらったかどうか。その方が良い。参加を拒む理由はない。

市 民：効率的に少ない時間で議論するため、あらかじめ、コアメンバー会議の出席者に情報を流して欲しい。

市 民：メーリングリストで、会議の前に、前もって内容を知ることが出来るなら、みんな分かった状態で参加できるし、用意できる。

松 井：そのようなことについて、原案はコアメンバー会議で決めて、会員の皆さんにお諮りするというのが市の認識でした。

市 民：コアメンバー会議での要点だけでも、会員の皆さんに流して欲しい。

松 井：では、以上でよいか。次回日程等は後日、連絡する。本日はありがとうございました。

以 上